

ロシア革命におけるレーニンとトロツキー

労働者の革命的民主独裁と永続革命

八木 沢 二 郎

(1) はじめに

周知のように、日本に於ける新左翼運動は五月六年のスターリン、抑鬱に端を発している。ソ連共産党二〇回大会に於いてフルシチョフはスターリンを批判し、スターリンの個人的質点の問題として、従来のマルクスレーニン、そしてスターリンへと継承されたとする「正統」の系譜を批判したのである。これが、いかに、官僚的自己保身に満ちた、マルクス主義からするならば、まったくとるにたりぬ批判であつたとしても、そこには巨大な歴史の重みが存在していた。実際、スターリンによつて与えられた「レーニン主義の基礎」にはじまる、マルクス主義、就中レーニン主義の理解、解説は、それまでの、マルクス主義者、の金科玉条をなしていた。ともかくも、この正統の系譜が打破られ、これまでマルクス主義者が信じてきた観念が惨めに粉碎され、歴史を歴史として見る事を強いた所にスターリン批判の巨大な意味があつた。

それ以降、イタリヤと中共という現在の中論争の代表的論客をなす東、西の二大共産党が、『プロレタリア独裁の歴史的经验について』(中共)や、『トリアンナ』等の一連の発言によつて、これに答えようとした。その批判の内容上の検討は、次号で取上げるであらう。

我々は、これらの「公認の」路線とは異なつて、スターリンによ

つて、二段階革命、反革命のあらゆるレッテルをはられ、トロツキーを販上げる事によつてスターリニズムへの根底的批判を表白したのであつた。周知の如く、トロツキズムとは、永続革命論を中軸として形成されている。私達は、スターリンのあれこれの教条に対する批判をトロツキーから学んだ。「國際戰略」に対しては、「永続革命論」を、「四社会主義論」に対しては、「レーニン」

「死後のホミスター」の中でトロツキーが展開している「國際主義」を、そして、死んだ硬直した思想や組織(あの「レーニン主義の基礎」に展開された、あるいは「弁証法的唯物論や史的唯物論」に展開された文字)——梅本克己が云う所の「形而上学的政治主義」(現代思想講座哲学、哲学の前置性)——に対しては、永続革命論の断える生々しい思想を学んだし、あるいはソツイエトのスターリン体制には「真切られた革命」が我々の手引となつた。このようにして与えられたスターリン批判への糸口は、はかり知れない程貴重なものであり、我々がトロツキーに負う所は巨大なものである。だが、その事は、我々がトロツキーの徒としてとどまつていてよいという事を意味するものではない。オ一はいりまでもなく一九四〇年に死んだトロツキーは、それ以降の世界の構造的变化を知られなかつた。という事である。だが、トロツキーの限界は、その事にとどまらず、いわゆるトロツ

「戦士」NO 6 (一九六五年)

キズム日水統革命論そのものの中にも存在していたと思われる。ト
ロツキは、なせ一九〇三年の分裂に際してレーニンの側にいかつ
たのか？、レーニン死後、なせスターリンに敗北したか？、才四イ
ンターは、なぜ、歴史的に見るなら破産したのか？、——これらの問
がトロツキに向けては行われなければならない。最後の問を除け
ばトロツキ自身解答を与えようとしている。(10)だが、それは
必ずしも満足しうるものではないように思う。私は、これらのトロ
ツキの行動は、トロツキズム、永統革命そのものの弱点としてと
らえなければならぬと考えている。(11)

だが、我々は、ともかくもスターリン批判をトロツキズムの導入
によつて開始したし、その事は、決して、何かまぐれによる事
でも、又、単なるスターリン批判をやりためだけの借りのでもなく、当
時の現実の運動の反映であつた。(12)

才一次ブンドは、一つの思想運動であり、しかも、当時の階級斗
争と、彼等が置かれていた立場に濃厚に規定されていた。

才一に、一国社会主義論に対する批判は、その現実形態たるフル
ンチヨフ平和共存路線に対する批判として展開された。つまり、
それが、体制間の平和共存を、与件として、あるがままに肯定した
地点から革命論を構築しようとするのに対して、トラスチックに、
国際ブルジョアジーと国際プロレタリアートの対立、という視点を
導入することによつて批判を展開した。この視点の形成の過程は、
周知の如く、学生運動史上にいう所の「平和擁護斗争の才一独立性」
の克服を通してなされたのであつた。

才二に、いわゆる「形而上学的政治主義」に対しては、高度成長
によつて近代日本にはじめてもたらされた、国家と市民社会の分離
というのが意図である。

ただし、ここでは、直接的にスターリンニズムの形成と展開を論
討するのではなくて、いわば、その前提条件としての、ロシア革命
に於けるトロツキとレーニンの検討を行いたい。

実際、マルクスレーニンとスターリンという正統の系譜とされ
ていたものが、スターリン批判によつて打破されたといえ、どの
よきな意味に於いてそうなのかという事は、ほとんど検討を放棄さ
れ野ざらしになつていっているのが実状である。

事実、スターリン批判以前は、レーニンとスターリンの同一性が
疑がわれる事なく主張されていたのに対し、現在では、その異質性
が、これも又疑がわれる事もなく信じられている。だが、その間の
敵意を関係を追求する事は、少なくともスターリン主義の形成を論
じるようではさげられないはずである。スターリンは、自己の正統
性をことごとくレーニンに見出ししそのように主張した。例え
ば二段階戦略は、「二つの戦術」に、一国社会主義論は「ヨーロン
バ合衆国のスローガン」に、官僚主義は「一歩前進二歩後退」に、
いわゆる形而上学的政治主義は「何をなすべきか」に——といつた
ように、日本の知識人は、スターリンが批判されると例によつて、
それを知らぬげにすてさつたが、このような関係に対して一度も敵
意を考察されたとは云えないのだ。私はスターリン主義の形成の
問題に対して、レーニン主義のもつロシアの特殊性と現代性という
側面から接近できると考えている。つまり、レーニンはその初期の
形成に際していかにロシアの現実を生かすましく反映していたこと
か、そしてまさに、そのロシアの民族的特殊性に肉迫することに

を前提とし、かつ、構造改革路線とは異なつて成立した大衆社会
を「件」あるがままに肯定するのではなく、むしろ、階級斗争の
敗北の結果として把握し、いわゆる近代主義——啓蒙主義に対して
シヤコパン主義的「永統革命的な日本革命論へと接近したのであ
つた。そして、それは、いわゆる市民民主主義的な政治斗争の中
で、その最左端の位置に立つた学生運動によつて規定された視点
であつた。

以上のようにして、要約して云うならば、才一次ブンドの理論、
思想は、我々がいう所の戦後才二期の階級斗争に規定され、あ
らゆる所に、その刻印を認めることができるのである。今述べた二
つの事——国際主義の問題と永統革命論——は、いずれも、きわ
めて、抽象的であり、むしろ、マルクス主義的な原理宣言とい
べきものであつた。問題なのは、それが原理的に過まつているの
ではない。否！むしろスターリン主義の支配のもとに歪曲された
原理を萬々と宣言する事は、それ自体、実践的な行為であつたと
云うべきであらう。にもかかわらず、それは、運動の発展段階に
応じて、より一層、具体化され深化されねばならない。階級性
民族性の弁証法的統一（ことばは、なんとやさしいことか！）、
プロレタリアートの「ゲモノー」の具体的形態——というふう
に、それ以降（安保以降）の困難な、しかし一貫とした歩みによつ
て、私達は、ようやくにして、トロツキを内在的に克服するこ
とができるようになったように思う。(13)そして、そのようなト
ロツキズムを克服した新しい立場からスターリン批判を再び行
再ると云う事ができる。つまり、スターリン批判をトロツキズム
の導入によつて行い、そのトロツキズムの克服を通過するという屈曲

つて同時に普遍的な帝国主義現代のマルクス主義として形成され
るといふきわめて弁証法的な関係をなしていたと考えている。こ
の過程で形成されたレーニン主義の核とは何かという事を明らか
にする事によつて、スターリン主義批判の前提を明確にできるで
あらう。

以上のようにして、私が、ロシア革命を検討するのは、スター
リン批判の前提を明らかにしておきたいというのが才一の考えで
ある。それと同時に——そして、才一のものと同連するが——一
方では、いわゆる現代革命の問題への接近を行うためには、結局、
帝国主義現代のマルクス主義としてのレーニン主義を明らかにし
ておかねばならないという事である。私はノートの一「ドイツ革
命の敗北とローザ」（「戦士」No 4）でいわれる「現代革命」が
どのような諸条件のもとに日程に整つてきたのかという事を不十
分ではあれ明らかにしておいたし、ローザの意義と限界について
も一応明確にできたと思う。要するに、いわば「永統革命型」と
も云える革命のイメージは、現代革命へ対応できないという事
であつた。

ところで、ローザと共に、「永統革命型」革命論の主張者ト
ロツキは、ロシア革命で、どのような役割をたしたか、——この
事をレーニンとの関連で検討する事によつて、トロツキの限界
と、現代革命に於けるレーニンの意義を明らかにする事ができる
だろうというのがもう一つの意図である。

これらの事を明確にしておく事は、間接的にはあれ、日本に
於ける新左翼運動の現段階が、どのような地点にあるかを明らか
にすることとなるであらう。日本に於ける思想が、いわゆる「外

来思想”の輸入にとどまり、個人ないしは組織が、それをもつて大衆を啓蒙するという方であり、それ故に、思想が持たねばならない、その荷手を見出す段階で、変質し、分解するという循環をどのように断つかということである。新左翼運動に於いても、構造改革のイタリママルクス主義の導入はもちろん、他の部分にあつても、帝國主義論を基礎に於いて、何か一個の体系をつくり上げる事が、理論であるかの如く見なされているが、(又、レーニンの理解についても、帝國主義論からときかこして、一個の体系と見なそうとするが)レーニンの実践は、一個の批判であり、思想を、その荷手との関連に於いて把握し、(それ故、いかなる思想も現実に根拠を有するものとして把握し)自己自身をも、歴史的なものとして、過去のロシアに於ける革命的伝統を、発見の、それを自己の契機としてふくむものとして存在していたのである、当時のオニイターとして与えられていた普遍的なものを、ロシアの民族的な革命的伝統の中に、さがし、発見、することによつて、逆にオニイターを止揚し、帝國主義段階のマルクス主義として(いわば、結果として)成立したという道すじは、現在の我々にとつてもふまえられねばならないのである。永続革命論という形で与えられた一般的な立場を、日本の革命的伝統と結合させ、その事によつて永続革命論を止揚すること——このことをレーニンとトロツキーの対吐の中で検討しなければならぬ。

①その内容については「ソ連共産党二〇回大会報告」(合同出版社)又、「秘密報告」については、勝部元編「スターリン主義の解剖」に収められている。
②もちろん、いわゆる国家独占資本主義の形成過程としての三十年代の革命情勢への対応としては有名な「過渡的綱領」(トロツキー)等があり、それは、現在の我々にも多くの示唆を与えてくれる。
③「わが生誕」
④ドイツチカーは、その名著「トロツキー伝」で、トロツキズムを「古典マルクス主義」とし、その強さも弱さも、その思想にあるとしている。その事にもとづいて、オニイターの終章は「勝利の中の敗北」オニイターの終章は「敗北の中の勝利」と題された弁証法的構成をなしているが、私は、トロツキズムを「古典マルクス主義」と考へるのには賛成であるが、それは、あくまでもトロツキーの弱点であると考へている。
⑤、ブンドのトロツキズムの導人は、いわばスターリン主義批判を行うための借り物であるという考へがあるが、決してそうではない。例へば、撤改派の中でトロツキズムに最も好意的と見られる飛鳥井雅道氏は「現代の理論」(新年号)で、そのように主張しているが、決してそうではない。
例へば、平和共存論(一國社会主義論の現実形態)への批判は、全学連の「平和擁護斗争のオニイター性」論からの「転換」という実践的要請と結びついていた。又永続革命論は、全学連小ブル進主義運動に立却する必然的帰結であつた。
⑥トロツキーに対する批判は、周知の如くスターリンによつて

て行われたが、それはトロツキーのある弱点をとつていたとはいへ、きわめて不当な歪曲にみちたものである。わが國に於いて、トロツキーへの評価はスターリン批判以後も正当に取上げられる機会は少ない。最も正確な理解にもとづく批判は簡単に注釈でふれられているだけだが梅本克三氏に見出しする。(「マルクス主義に於ける思想と科学」)又、國際的には、Aグラマンの批判のみが、真に取り上げるのにふさわしい。それに比すればトリアツテイのトロツキー理解は、スターリンとあまりかわらない。「トリアツテイとの対話」上
⑦なお、「ノート」執筆後、いくらかの同様な現代革命論への接近を試みた著作が出された。代表的なものはムーアの「三つの戦術」であるが、これは、一種の類型学であつて、とうてい現実的問題意識に、耐え得るものではない。特に、レーニン主義の意義を明らかにする事のない革命論で、現実性がないと思う。藤本進治著「革命の哲学」は多くの点で教えられる所があつたし、又、私が、「ノート」で述べた、一八四八年(永続革命論)オニイター型革命—現代革命という革命論の展開を別の面から(つまり、プロレタリアの内的矛盾の展開という事から)明らかにしているものとしても興味深かつた。ただ、藤本進治氏の云う「原理の展開」という政治的主張に対しては賛成できない。という意味は、要するに原理は原理として存在するのではないという事、原理を一直線に政治的主張へ持ち込む事はあやまりであるという事である。原理の展開さるべき諸条件を明らかにすべく上向的展開がなされないと、原理は、いわば「一般の関式」として抽象的なものとなるであらう。現代革命論への接近も藤本氏の明

らかにしたし二—三以降へわたつて具体的分析が加えられない限り真に有効なものとはなり得ない。ただ、その分析の際の視点を与えたという意味ではきわめてすぐれたものだと思う。
一九一七年のロシア革命は、レーニンとトロツキーの指導のもとに成功した。だから、永続革命論者トロツキーは、ドイツに於けるローザのように敗北し殺されるのではなく逆にロシア革命の榮光につつまれることになつた。トロツキーの理論は周知のように永続革命論であつた。ロシア革命の成功は、永続革命論の成功を意味していたかのようであつた。
他方、レーニンの見通しは、「労働者農民の革命的民主主義的独裁」として一九〇五年のロシアオニイター革命に於いて定式化されていた。少なくとも一九一七年に關する限りは、レーニンよりもトロツキーの見通しの方が明確であるように見えた。トロツキーの主張は、ロシアの如く後進國に於いては、農業革命(社会経済的内容)と政治的自由(政治的内容)を獲得するというブルジョア民主主義革命が課題にほなる。だが、内容がブルジョア民主主義革命であるうとも、ブルジョアジーが反動化し、ツァーリの保護下にある時、革命の主体はプロレタリアートである。そして、その事によつてロシア革命は、ブルジョア民主主義革命にとどま

ることなく、プロレタリア社会主義革命へと、永続的に発展する
ものである。といふものであつた。この革命の見通しは、一九一七
年の二月十月革命の発展が、いわゆる「二段階戦略論」が云うよう
に、まずブルジョア民主主義革命が（二月）、しかる後にプロレタ
リア革命が（十月）といふふうな固然と分離されて進行したのでは
なく、きわめて、複雑な、両者の混合した過程をたどつた事を考え
る時正しいように思われる。

④いむゆる二段階戦略が、今日のよりな形でドラマ化する傾向は、
すでにスターリン「レーニン主義の基礎」（米七章）「戦術と戦術」
國民文庫版（九八一）にある。そして確定的にしたのは、コミン
テルン六回大会の有名な戦術の分類によつてである。

実際二月革命によつて、古典的な意味でのブルジョア民主主義革命
が達成されたわけではなかつた。「古典的な」という意味は、イギ
リスやフランスで現われたそれは政治的には絶対主義戦権力を打倒
し、社会経済的には農学革命をふくむものであつたが、ロシアに於
ては、政治権力としてのツァーリは打倒されたが、二月革命によつ
ては、決して農学革命は達成されなかつたからである。農学革命は
十月にも達成されたのではなく、それ以降の一定の時間をかけてな
されたのであつた。従つて、革命の社会経済的内容から規定する本
らば、一九一七年の革命は、社会主義的内容と民主主義的内容は、
十月革命によつて、プロレタリアートの力によつて、革命的に達成さ
れ、その革命がである。他方、その政治的性質から規定するならば、
レーニンが述べているように（二月十月と二段階的になされた）
といふのである。

⑤一九一七年の二月—三月革命以前には、ロシアの國家権力は、

版才一文冊（一一二）そして、リヴォフ公を首魁とする政府ができ
あがつた。

この政府は、ミニリーコフ、グチコフらのカデイト（立憲君主主
義者）を主体とした、本質的にブルジョアジーの政府であつた。そ
して、他方では、ソウイェトが成立し、いわゆる二重権力状況が現
出して来た。このソウイェトは成立の初期の段階では、エヌエルレ
ケレンスキー等）、メンシエウイキ（ツンテリ、チハイゼ等）が
主流をなし、ボリシエウイキは少数派であつた。（トロツキー「ロ
シア革命史」によればソウイェト代表四〇〇名中約一割）そして、
このソウイェトは、臨時政府に対して、明確な態度を取る事なく事
実上の支持を与えていたが、それは、特に戦争の問題に集中的に表
現されていた。ソウイェトの主流をなしていたエヌ、エル、メンシ
エウイキは、絶対主義ツァーリが打倒された段階での戦争は帝國主義
戦争ではなく防衛戦であるという観点から戦争の継続を支持したの
である。

⑥この絶対主義ツァーリの戦争は、いわゆる軍事的封建的帝國主義
論とよばれるものと関連してあり、周知の如く、終戦後、日本の
天皇制ファシズム論の中で、志賀一神山論争として争をわれた問
題と関連している。この論争は、いわば「理論外」の地点で志賀
の正当性が認められたよりな形で終了したが、再検討の余地があ
らう。特に、神山が、三二七一を深める形で提起した軍封帝國
主義論は、日本のウルトラ、ナシヨナリズムの進行という情勢と
関連していると思われるので、ナシヨナリズムが問題とされる現
在、再評価する事は單に学問上の關心のみにとどまらなないであ
らう。

一つの古い階級、すなわちニコライロマノフを頭とする農奴主
的貴族的地主階級の年にあつた。この革命以後には、権力は他
の新しい階級すなわちブルジョアジーの手にある。革命という
概念に科学的意義においても、實踐的、政治の本質において
も、國家権力が一つの階級の手から他の階級の手に移つたこと
が、革命の本質、主要な、基本的標識である。「このか
ぎりで、ロシアのブルジョア革命またはブルジョア民主主義革
命は終了した。」（レーニン全集二四、戦術にかんする手紙、
P五七、年レーニン、傍線引用者）

以上のようにして、革命をどのようにして、つまり政治的性質か、
社会経済的性質か——規定するかによつて、レーニンとトロツキ
ーの主張は、どちらにも正しいと云うことができる。だから、労
農独裁論と永続革命論の相異は取るにたりのものであり、それ
は單に言葉のいまいわしの問題だ——と云う事もできよう。だが
私は、そうではなく、この二つの間には、現代革命といふものに
対する両者の認識の相違が横たわつていたと考える。だが、その
事の検討は後にするとして、レーニンの労働独裁論を中心に、更
に若干の考察を加えておこう。

それは、周知のようにレーニンがスイスから帰国する以前のボ
リシエウイキが混乱し、メンシエウイキの傾向に流れていた事に
かかわる事である。つまり、ボリシエウイキのこの段階での混乱
は、はたしてレーニン自身に責任がなかつたのかという事である。

二月革命によつてツァーリは、革命がまだその最初の問題に
ちかづくいものなかつたうちに、さながら腐敗した果実のよう
に揺れ墜ちた。（トロツキー「ロシア革命史」小西沢角川文庫
版）

ここでは展開する余らも場所ではないが問題意識のみを略記
しておけば次のような事である。

神山は、近代的（という意味は、独占資本の成立によつても
たらされる）帝國主義と區別して絶対主義のもとに展開される
帝國主義として軍封帝國主義を持ち出しているが、レーニンは、
かかる意味でそれを使用しているとは考えられない。独占資本
の成立と共に、それが展開する帝國主義の特殊な型として軍封
帝國主義を云々しているのだから、独占資本と別に軍封帝國主
義が存在しているわけではなからう。このよりな意味では、
天皇制のファシズムたる本質を指適する志賀説が正しいと思う。
しかし、日本の戦術論争に一貫として流れる「國家権力の階級
規定」という一種のタイプ分析を脱して、真に労働運動の綱領
としてのリアリティを持つとする努力、問題意識という意味
では、まさに日本資本主義の特殊性を軍封帝國主義という形で
表現しようとした神山は評価されねばならないであらうし、そ
の事は、戦前の全協問題、擬装転向といつた神山の党主流への
批判と合わせて考える時一層せうだといえよう。

ソウイェトを代表する形で執行委員会が設置されたが、この委
員長にはメンシエウイキの国会議員団長チハイゼが就いた。この
ソウイェトは、一九〇五年のそれのより、労働者階級の大家ス
トライキと蜂起という戦斗の過程で形成されたというよりも、兵
士の反乱が先に行われたため、兵士の比重が多く、かつ、上か
ら形成されたという側面を持つていたといわれる。（トロツキ
ー「ロシア革命史」才五分冊）

⑦ロシア革命の具体的事実を述べる事に、この小論の目的があ
らう。

るわけではないが、その点では、トロッキー「ロシア革命史」(角川文庫版)、「ドイツチャー」「トロッキー伝」(一巻、三、日カ「ソヴイェト革命史」)「リ党史」によつた。最後のものは、教科書的無味乾燥という点だけではなく史実的にも信用しがたいものである。トロッキーの名著「ロシア革命史」による所がほとんどであつた。これは、トロッキーの革命に対する考え、永続革命論の見地から書かれていたため評価という点では賛成できない点もあるが、史実の点では信用出来ると思う。更にレーニン全集二四、二五、二六巻を刻明に読む事が——特にこのテーマからするならば二三巻の「遠方よりの手紙」以下、二四巻の各論文——必要である。

革命の初期の段階では、大衆の臨時政府とソヴイェト執行委員会への態度は、「執行委員会」の決定にその限り於て、臨時政府を支持する」というものであつた。そして、当初、この両者のプロックのともに事態は推移した。

だが引き続き戦争と、そのもたらす食糧不足は、大衆の不满を増大させ、臨時政府外相ミューリコフのダータネルスの占拠を突破口とした新たな功勢の計画が発表されると共に爆発した。いわゆる四月事件であつた。この結果、ミューリコフは退陣に、それと共にそれまで閣外にあつた、エヌ、エルとメンシエウイキが入閣してブルジョアジーと「社会主義者」の連合政権ができた。

これらの諸事件は、いまだレーニンがロシアに到着する以前に生じた事であつた。メンシエウイキが、以上に述べたように、ブルジョアジーとの妥協を行つた事は、彼等の理論からするならば、いささかも不思議な

——ブルジョア民主主義革命を目標とするとはいへ、ロシアブルジョアジーが、古典的ブルジョア革命の如く革命的能力を持つ事ができず、プロレタリアートの斗争を恐れて絶対主義と妥協し屈服している時、革命の主導者はプロレタリアートでなければならぬと考へていた。この点でメンシエウイキの立場とは峻別されていたのである。何もかかわらず、レーニンは、同時に、永続革命論にも反対し、労働独裁論を主張した。このレーニンの提起の意味を明らかにする事は、もう少し後に進むが、当面次の事だけを明らかにしておくは十分である。

オールド、ボリシエウイキは、レーニンを次のように理解したのである。つまり、ロシアに於いては、まず、労働独裁が打立てられ、それは、ボリシエウイキの最少限綱領を實現する事を任務とする。(最少限綱領は、民主共和制、八時間労働、土地革命を三本柱とする)しかる後に、はじめて社会主義革命が日程にのぼる。しかるに、五月革命によつて、決して、これらのブルジョア民主主義的課題——就中農業革命は、いまだ達成されてはいない、つまりブルジョア民主主義革命は終了してはいない。だとするならば、ボリシエウイキの任務は、このブルジョア民主主義革命の達成にある。——これが、オールド、ボリシエウイキの認識と政策であつた。このより大事の喫緊の結核は、臨時政府に対して民主主義的諸方策を行へという事、つまりメンシエウイキとほとんど異なるものとなつたのである。

このよりな政策に対する斗争は、レーニンによつてはじめて試みられたが、オールド、ボリシエウイキは容易にはレーニンに従がわなかつたし、しかも論拠としてレーニンのかつての主張を持ち出したのであつた。レーニンは、「このテーゼ——いわゆる四月テーゼ

事ではなかつた。メンシエウイキは、ロシアの革命は、ブルジョア民主主義革命であるから、その荷手も又ブルジョアジーである。社会主義者とプロレタリアートは、このブルジョアジーに対して左から圧力をかける事を任務としなければならぬというものであつた。だから五月革命によつて、まさにブルジョア革命が行われた時、それに対して左から圧力をかけるという方向を打出した事は理の当然だつたわけである。

問題は、ボリシエウイキの態度であつた。彼等は、レーニンの到着前、主としてセーメネツとスターリンの指導のもとに、事实上、メンシエウイキと同様の態度を取つて、いわばソヴイェトに臨時政府を監視するという任務をおかせたのである。更に、四月事件で明らかになつたように、継続されている戦争に対して、国際主義の原則をふみはずし、事実上社会平和主義的立場に立つて、戦争の即時打ち切りと無併合の原則にたつた譲和をよびかけるという事をしなかつたのである。

このよりな、いわゆるオールド、ボリシエウイキの態度は、メンシエウイキと同じ理論的立場から導き出されたものではなかつたが、同じ態度をもち出したのは何故か、その責をレーニンは負うべきなのか?

ボリシエウイキのロシア革命の展望は、レーニンの「二つの戦術」(一九〇四年、レーニン全集九巻)によつて与えられた。労働者農民の革命的民主主義的独裁論であつた。これは、メンシエウイキの如く学者風の当面する革命がブルジョア民主主義革命だから、その荷手もブルジョアジーだというひからびた図式からは無縁であつた。レーニンは——その点ではトロッキーと同様に

……引用者——と、さらに私の報告とは、当のボリシエウイキのあいだでも、また「ブラウダ」編集局内でも、意見の相違を呼びおこした。いくども話合つたのち、われわれは、これらの意見の相違を公然と討論に付し……」(レーニン全集二四、「戦術にかんする手紙」P二六)と述べている事は、この対立の大きさを物語つてゐる。

レーニンは、二月以降の特徴と政策を四月テーゼで圧縮して述べている。「ロシアにおける現在の時機の特異性は、プロレタリアートの自覚と組織性が不十分なために、権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧民の手中に権力をわたさなければならぬ革命の才五段階への過渡ということにある。」(全集二四、P四)つまり、民主主義的独裁ではなく社会主義革命が日程にのぼつてゐる事を主張したのであつた。更に、彼は、この事を理解しないオールド、ボリシエウイキに対し、「われわれの学説は教条ではなくて行動の手引である」(才十七巻P二五二)——マルクスとエンゲルスはつねにこのように言つて「公式」を標記したり、たんに繰り返すのを嘲笑したが、それはもつともなことであつた。「公式」というのは、せいぜい一般的任務のあらましをしめすことができるだけであつて、それらの任務は、歴史的過程のそれぞれの特長を局面における具体的を経済的および政治的状況によつて、かならず修正されるのである」(全集二四、「戦術にかんする手紙」P二六)と述べ、「ねえ君！理論は灰色で、緑なのは黄金なすき輪の樹だ」(同上、P二九)とも云つてゐる。——このように、レーニンは、労働者、農民の革命的民主主義的独裁」(以後、

労働独裁と略記する……八木訳)の「公式」を具体的状況に適應し
なければならぬと強調したのである。

そして、又、彼は、「ボリシエウイキのスコロガンと思想が正し
かつたことは、一般的には歴史によつて完全に確證された」(同、
P二七)として、『労働独裁』を擁護した。ともかくも、このレー
ニン到着後の「党の再武装」(トロツキー「革命史」二P一二九)
は、レーニンの卓抜した力量と、大衆自身の圧力によつて克服され
た。

だが、我々は、レーニンが「公式」とよんだものを——そして、
オールド、ボリシエウイキの混乱の源となつたもの——をふりかえ
つて検討しておかねばならない。

この「公式」は、一九〇五年のロシア第一次革命の過程で形成さ
れた、レーニンの「民主主義革命における社会民主党的二つの戦術」
(全集九、以後「二つの戦術」と略記——八木訳)によつて与えら
れたものである。

先にも述べたように、ロシアに於ける、当面する革命は、ブルジ
ヨア革命であるという見通しは、当時の社会主義者の共通の見解で
あつた。そして、メンシエウイキは、だからその荷手もブルジョア
ジーであると主張し、トロツキー、パルヴスは、にもかかわらず、
プロレタリアートのヘゲモニーによる社会主義革命であると主張し
た。そして、レーニンは、この両者に反対した。

レーニンの見通しは、「ツァーリ専制を民主的共和制にかきかえ
ること……」(「二つの戦術」P一三)と述べられているように、
ロシア革命の当面の課題は、ツァーリ絶対主義打倒(民主共和制と
農業革命)である事、そして、そのためには、「憲法を制定する議

参加することは原則的に許されるし、プロレタリアートの革命に於
けるヘゲモニーを強調した。

以上のようにして、レーニンの主張は、一方で、プロレタリアートの
ヘゲモニーを強調しつつ、他方で、当面の革命と社会主義革命を
峻別するという一見矛盾したものであつた。それ故に、トロツキー
の見通しの方が、はるかに合理的、明快であるように見える。そし
て、それ以降、臨時政府は、どのように発展するかという点では、
「最後に(最後ではあるが)いちはん重要でないというわけではない)
革命の火事をヨーロッパに飛火させることができるであろう。だが、
こういう勝利は、まだ待つて、わが国のブルジョア革命を社会主
義革命にはしないであろう。民主主義的変革は、直接にはブルジョ
アの社会経済諸関係の枠から脱けだしたくないであろう。しかし、
それにもかかわらず、こういう勝利の意義は、ロシアだけでなく、
全世界の将来の発展にとつて、巨大なものとなるであろう。ロシア
にはじまつた革命のこの決定的勝利ほど、世界プロレタリアートの
革命的エネルギーをたかめるものはないだろうし、世界プロレタリ
アートの完全な勝利への道をこれほどいちじるしくちぢめるもの
ないであろう。」(同、P四六)

と、いうふうに、革命の「飛火」にかけたのであつた。つまり、プ
ロレタリアートによるブルジョア革命という矛盾の止揚を世界革命
への発展ということに見出したのである。

一九一七年に於いて、このような見通しは、どれほどまで現実
的であつたのであろうか？オールド、ボリシエウイキの主張は、あ
る意味では、レーニンの「公式」に責任があるといわねばならない。
レーニンは、当面の革命と社会主義革命を、別し、その展開を、世

会が絶対に必要である」(同、P一三)、そして又それは、ツァ
ーリ反動を粉砕することを前提とする以上「選挙前編劇の完全な
自由を保障することができ、また人民の意志を真に表明する議会
を召集することのできるのは臨時革命政府であり、しかも勝
利した人民蜂起の機関であるような臨時革命政府だけである」(同、
P一四)としたのである。

そして、問題は、この人民蜂起の機関として形成されるであら
う臨時政府の性格と、それに対するプロレタリアートの態度とい
うところにあつた。

この臨時政府は「プロレタリア民主主義法の最小限綱領を實現す
るものでなければならぬ」(同、P一五)とされ、社会主義革
命に対する次のような見解が述べられるのである。「最後に、決
議は、最小限綱領の實現を臨時革命政府の任務とすることによつ
て、最大限綱領の即時実現とか、社会主義的変革のための権力獲
得とかいう、ばかげた半ば無政府主義的な思想を排除しているこ
とを、注意しておこう。ロシアの経済的発展の程度(客観的条件)
とプロレタリアートの広範な大衆の自覚と組織の程度(客観的条件)
と切りはなれないようにむすびついた主観的条件」とからし
て、労働者階級を即時完全に解放することは不可能である。いま
進行している民主主義的変革がブルジョアの性格のものであるこ
とを無視できるのは、まったく無学な人々だけである」(同、P
一六)として、当面の革命と社会主義革命を、別したのであつた。
にもかかわらず、レーニンは、この臨時政府に対し「最左翼の革
命的反政府にとどまらなければならぬ」(同、P三三)とする
メンシエウイキに対して、プロレタリアートは、この臨時政府に

界革命にかけたのであつたから、二つの革命の間に、どれ程の
時間と、どのような過程が介在するかを明確にしたわけではな
かつたが、「二つの戦術」にも散見されるように、二つの革命の間
には、かなりの時間——少なくとも一年といつた短い時間ではな
く、あたかも革命政府が、存続し、憲法制定議会を召集し、その
議会のもとに共和制が一つの体制として(周知のごとく、一九一
七年では、制定議会は、逆にボリシエウイキによつて解散せしめ
られたし、その事は、レーニン、トロツキーらがカウツキー等に
対する論争の一つの中心となつた。又、ローザでさえ、それに反
対した。——ローザ「ロシア革命論」選集四)存在しうるかのよう
な主張がなされているのである。又、後にも述べるように「社会
民主党と臨時革命政府」(全集八)に於いては、臨時革命政府が
社会民主主義政府になるというパルヴス(これについても後述)
の主張に対して、そのような事は、「エピソード」的にはありう
るが、長期間存在し得ない(同上、P二八八—九)と明確にい
切つているところから見ても、その事は明らかである。恐らく、
臨時政府の構成主体として、レーニンは、小ブルジョア(農民
の代弁者(一個の政党であるかは別として))を、想定する以外に
なかつたであろうが、そのような事は、二月十月の段階で、エ
ス、エルが(それ自体農民を代表していたとはいへないが、レー
ニンが想定したと思われる農民代表という意味では、エス、エル
左治を云いうるのみであろう)、それこそエピソード的に政権に
ついたらすぎない。

以上のようにして、レーニンの「公式」からするならば、オ
ールド、ボリシエウイキの混乱を生む要因が十分に存在していたと

いふ事は認めなければならぬと思われ。

レーニンは、「公式」を固執するなとか、好んでゲーテの言葉「第三の理論は灰色で、緑なのは黄金なす生命の総て」を上げて、革命的現象主義を主張する一方、「公式は、一般的には確證されたが、それは、別の形態に於いてである」(全集二四)と上かと主張し、労働強欲は、ソツイニト、という形態で表現したこと、その事によつてブルジョア革命は終了し、社会主義革命へ前進しなければならぬと主張した。だが、その事は、少くとも「二つの技術」に替はれた言葉からするならば、強弁であるといわねばならぬであらう。

しかし、にもかかわらず、その事はトロツキーの主張と実践の正しさを証明するものであらうか。

そして、又、レーニンは、主張した言葉にもかかわらず、現実には、四月の「党の再武装」によつて革命に成功したのは、一体、レーニンの術によるのか？ いうならば、レーニンの精神、思想の核は何かという事を明確にしなければならぬように思われる。かつて、我々(第一次ゾンド)の主張は、レーニンは世界戦争に当りて世界革命の一環としてロシアでも社会主義革命が日程に登つてゐる事を認めたとし、つゞき、レーニンとトロツキーの二つの主張を、世界革命という事によつて調和せよとし、たゞに、この立場は、後にスターリンによつて、革命の分類学が行われ、たゞ一國の経済的發展段階からのみ革命の性格を規定するといふ一國社会主義に起因するばかりな試み(一九二八年コミンテルン六回大会)に対する批判としてはいままなお有効である。しかし、逆に、その半によつて、レーニンとトロツキーの相違をいまいにし、調和さ

すはこう述べている。「ドイツに於いては、ラディカルな革命が普遍的な解放が空想的な夢ではなく、むしろ部分的な、たんに政治的な革命、家の柱に手をつけない革命が夢なのである」(「ゲル法哲学批判序説」全集一、P四二四)このように、普遍的な解放、社会主義革命と、政治的な革命、ブルジョア民主主義革命が区別され、ドイツに於いては、プロレタリアート以外に革命の荷手がなない以上、革命は、普遍的な解放のものである事が、確證されている。そして、云うまでもなく、この考えは、トロツキーのロシア革命論と、きわめて大きな類似性を持つてゐる事、永続革命の思想である事は明白である。トロツキーは、この永続革命論をマルクスから取つてき、それをより一層深化させたと言ふ事ができるであらう。確かに、当時のドイツと、一九〇〇年代のロシアの条件は異なつたものであつた。マルクスは、プロレタリアートの「発見」を当面するブルジョア革命という詳細を通して行つた事は、当時の世界的な歴史的發展段階に規定されてゐたし、一方、トロツキーは逆に社会主義革命へいたる一つの過程としてブルジョア革命を考えたという点で、両者の(ブルジョア革命と社会主義革命の)關係はちよど逆の位置に、かかれてゐる。しかしながら、一八四〇年代のドイツに於いてさえ、マルクスは、社会主義革命を想定したとすれば、一九〇〇年代のトロツキーが、永続革命論を主張した事は、当然すぎるといつてもよいのであらう。だが、結論から云うならば私は、歴史そのものの展開によつて、永続革命論は、マルクス自身が止揚したし、更に、トロツキーによつては、逆にレーニンの「労働強欲」の思想の中に流れ込んだものと考えてゐる。

せよとした限りでは正しいものとは云えない。(註)

①「第一次ゾンドのロシア革命の評價」は、その形成期に重要な役割をはたしたといはれる山口論文「ロシア革命の道と我々の道」(これについては、最近、阪大新聞出版部より出された資料等「世界を獲得するために」にある)を参照。

我々は、この両者の關係の中で、現代革命論への接近を行うために、秘密な検討を行わねばならぬ。

☆ ☆ ☆

マルクス主義に於ける革命論からするならば、プロレタリアートのヘゲモニーによる。ブルジョア民主主義革命という考え方は、決して、目新しいものではない。

むしろ、マルクス主義の形成そのものが、そのよりの矛盾した事柄の解決としてなされたと言へるのである。

周知の如く、マルクスに於けるプロレタリアートのヘゲモニーの思想は、一八四四年の著作「ゲル法哲学批判序説」(マル、エン選集補巻四、全集一)に、はじめて現われる。それは、ドイツに於ける当面する革命という問題(ブルジョア民主主義革命)から出発しつ、ドイツに於いてはすでにブルジョア階級に革命の能力がないことを確證し、まさにその革命の荷手としてプロレタリアートを「発見」(これは猪木正道の主張だが、この限りでは過まつてゐるわけではない)するといふ形でなされた。マルク

トロツキーは、永続革命の思想を直接的には、バルガスから学んだ。(註)

②「トロツキー伝」一、ドイツチャー著、知的協力者との關係の章。

ロシア革命が、ブルジョア革命にとどまり得ないと考えたのは最初にはバルガスであつた。たゞし、一九〇四年の段階で、バルガスも「労働者政府」とはいつても、それがプロレタリアートの独裁であると云わなかつた。(「トロツキー伝」)この点をおしすためプロレタリアートが権力を奪取すると主張し、永久革命論を初めて首尾一貫して主張したのはトロツキーであつた。(註)

ところで、レーニンの永久革命論への態度という興味ある問題は、少なくとも一九〇四、五年の段階で、レーニンが、永久革命に反対してゐた事は明らかである。確かにトロツキー自身が述べてゐるように(註)「永続革命論」(「永続革命論」)レーニンは、直接に、この「結果と展望」を読まなかつたのは事実だとしても、先のバルガスの説に対してさえ反対してゐるのである。「残念なことには、むだ口座のトロツキーとともに、トロツキーのむだ口座のむだ口座のむだ口座(一月九日以前)への序文の中で、……」とトロツキーをのしつた後、

「バルガスのつぎの諸命題も同じ理由によつて、まづたく同じよりにまぢがつてゐる、すなわち、「ロシアに於ける臨時革命政府は労働者民主主義政治の政府であらう」もし社会民主党が、ロシアのプロレタリアートの革命運動の先頭に立つたら、この政府は社会民主主義政府となるだらう」社会民主主義的臨時政府は「社

会民主主義者が多数を占める等質的を政府となるだろう」というのが、それである。もし偶然的瞬間的のエピソードについてはなく、いくぶんでも長期にわたる、いくぶんでも歴史にその跡をとどめることのできる革命的独裁について論じるならこういうことはありえないことである。こういうことはありえないというのは、いくぶんでも過去の(ハ)ももちろん絶対的ではなく、相対的であるが、(ハ)なることのできるのは、人民の膨大な多数者に依拠する革命的独裁だけだからである。だが、ロシアのプロレタリアートは、いまはロシアの住民のうちでは少数である。それが膨大な、「倒的多数になることのできる」のは、半プロレタリア、半経営主の大衆、……、後略(「社会民主党と臨時革命政府」全集八、P二八八―九)と述べていることからして、永続革命論に反対していたことは明瞭である。

④「社会民主主義は、一方でプロレタリアートのために最小限綱領の全体を実施し、他方でブルジョアジーのために厳密にこの綱領の限界内にとどまるといふ二重の義務のもとに権力をとるわけにはゆかない。……中略……したがって、ブルジョア革命の内部におけるプロレタリア独裁(または、プロレタリアートおよび農民の独裁)の特殊な性格、すなわち純粹に民主的を独裁について云々することは不合理である。労働階級は、その民主的綱領の限界を踏みこえることなしに、その独裁の民主的の性格を保障することではできない」(トロツキー選集五「結果と展望」P三三―三三三)

⑤「レーニン」の古い著作を読んでみてわかつたことだが、レーニンは上述の基本的な論文を読んでいなかつたということをご指摘しておきたい、以下略(「トロ選五」永続革命論「P一

歴史そのものの限界と云える。

この段階での社会主義は、当時の資本主義の発展と階級斗争の段階に規定されたものであつた。エンゲルスが述べているように、一八二五年のイギリスの恐慌は、商品関係が、生産過剰をも把握し一応資本主義が成立したことを示すものといつてよいであらう。だが、いわゆる、イギリス綿工業を世界の工場としつつ、産業資本主義段階の典型的な展開がなされるのは一八五〇―一七〇年の間である事を考えるならば、それ以前に於いては事態が若干異なるといわれなければならない。事実、この段階でのプロレタリアートは近代のプロレタリアートと農民の中間的形態としての「貧民」ともいふべきものであつたと考えねばならないであらう。そして、階級対立のこのように段階に応じて、その社会主義も、「少数者革命」といわれるように、著しく一時的、陰謀的、秘密結社の性格が濃厚であつたのである。そして、マルクスもエンゲルスも、一時は、そういつた、フランスの社会主義に當っていた。(⑥)

⑥「思想」一九六四年十二月号の水田論文参照。

だがそれは、時代をこえることはできず、ルソーの市民的永久革命と、「少数者革命」の克服(「継承」)は、マルクスによつてなされた。先に述べたように、マルクスは、「ヘーゲル法哲学批判序説」の中で「フランスでは、部分的解放が全般的解放の基礎である。ドイツでは、どんな部分的解放にとつても全般的解放が必要条件である。完全な自由をうむべきものは、フランスでは段階的解放の現実性であり、ドイツでは段階的解放の不可能性である」と、永続革命を主張している。とはいへ、マルクスの史的唯物論の形成過程からも明らかのように、この段階(一八四三、一四号)で、ただちに、

八九―九〇)

それでは、マルクスの永続革命論から学んだトロツキーの永続革命論は、真に歴史に対応したものであつたらうか。その事は、マルクスの永続革命論が、その後、どのような展開をとげたかを見ればならない。

ノート一で述べておいたように、永続革命論の起原は、すでにルソーに存在していた。即ち「一般意志」という形で。人民の主権を徹底化するということが、一個の政治制度なり機構なりと対立した「一般意志」とは、共同体を打破して資本主義の発展が、市民社会を成立させ、国家と市民社会の自律性を生みだした段階で、市民社会の徴税を宣言する事を意味している。つまりルソーは「一般意志」ということによつて、マルクスがいう所の「部分的政治的解放」から「普遍的人間の解放」への移行の直前まで進んでいるわけである。ルソーの限界は歴史の限界であつた。(⑦)ルソー以降、その急進主義的側面は、バブーフ、フナロツテイラによつて継承された。

⑦という意味は次の通りである。

ブルジョア革命は、コニユフアクチヤ段階に対応しているから、すでに萌芽的ではあれブルジョアジーとプロレタリアートの対立をふくんでいる。だからブルジョア革命は、通常ブルジョアジー自身によつてになられるというよりも、その思想をこえてつき進み、小ブルジョアや萌芽的なプロレタリアート(貧民)によつて荷われる。ルソーは、かかる萌芽的な階級対立に照応していたから、階級対立の一層の進行を前提とするプロレタリアートという概念に到達し得なかつたのは

過去の歴史的残三をすてされるものではなかつた。「ユダヤ人問題」から「ヘーゲル法哲学批判序説」でのプロレタリアートの発見、そして「ドイツイデオロギー」で、史的唯物論の成立を見、そして、「共産党宣言」へといたる理論的展開と、他方で、何よりも一八四八年二月革命の経験が必要であつたのである。マルクス主義に於ける革命論は、二月革命を境として質的な飛躍をとげる。過去のフランス社会主義から継承した急進民主主義的残三を最終的に克服するためには、二月革命の経験が必要であつた。それは、あたかも、四七、八年の恐慌を経て、典型的な産業資本主義の段階が、イギリスを中心として展開せんとする、まさにその入口にあつていたのである。

どのように、二月革命は総括され、それ以降の展開はどのようになされたのであろうか?

先に、「ヘーゲル法哲学批判序説」でのマルクスの論を永続革命論と述べたが、マルクス自身が、そうとつていないわけではない。むしろ、マルクスが、「永続革命」という語を使用しているのは二月革命の総括の中に於いてである。

「一八五〇年三月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」の中でマルクスは、その文章を最後を「彼ら(プロレタリアート……引用者)の戦いの」の声はこりてなければならぬ――「永続革命」と。(マルエン全集七、P二五九)という有名な章句で結んだ。だが、ここで使用された永続革命は、すでに「ヘーゲル法哲学批判」に於いて展開された思想とは異なつていふように思われる。異なつていふというよりも、克服――発展されたと云うべきであらう。

この「呼びかけ」は、マルクスが四八年二月革命（ドイツでは三月）の敗北の後に、一時持つていた、直接的なプロレタリア革命の勝利という展望を自己批判し、きたるべき革命へ向けて、プロレタリアートとその指導部がどのような方向を見ざればならぬかを述べたものである。その中で、マルクスは、反封建諸勢力の役割を分析しつつ、主として小ブルジョア民主主義法に對して、プロレタリアートが断固たる独自性を保持しなればならぬ事を主張しているのである。客観的な歴史の成れの度合からいへば、きたるべき反封建斗争に於いて、絶対主義の打倒の後にプロレタリアが権力を握るといふ事は不可能である。「ドインの労働者は、かなり長い革命的発展を完全に経過しつくさないうちは、支配権をにぎることもできず……」（同、P二五九）——にもかかわらず、武装斗争をふくめて、プロレタリアートが断固たる独自の組織を目ざす事が必要である。かくて、プロレタリアートは、権力を握るまでのある期間（マルクスによれば「かなり長い」）を権力と敵対し、他の反封建勢力からの独自性を保持しつつ権力掌握まで革命を永続させねばならぬ——マルクスは、このような意味で「閥の声は永続革命だ」と云つたのであつた。だから、この場合、永続革命は、ほとんど、プロレタリアートの独自性、規律性（マルクスによれば、主として小ブルジョア民主主義法からの）という意味でつかわれているのである。

以上のように、「ヘーゲル法哲学批判」に於ける永続革命の思想は、一八四八年の革命を境として、プロレタリアートの組織性、独自性という方向で発展させられたのである。実際、これを境として、フランス社会主義と、ドイツ古典哲学の結合の生ま生ましい跡をたてている事、両者の構成の類似性は明瞭である。とはいへ、後述するようにその事は、両者に質的相違（歴史的發展段階のちがひにもとづく）のある事を否定するものではない。

それ以降のマルクス、エンゲルスの運動の方向は、オニインターオニインターの活動として展開された。^②

その内容については、これ以降の論の展開にあつて、ぜひとも必要なのだが、ノート一でふれておいたので、再説しない。「フランスの階級斗争」への有名な序文をはじめとするエンゲルスの諸著作

マルクス、エンゲルス「労働組合論」（國民文庫）カウツキ「権力への道」コール「イギリス労働運動史」（岩波現代叢書）

「産業合理化と労働運動」（法政大学出版会）等を参照されたい。

「資本論」が、この一八五〇—一七〇年のイギリスに於ける資本主義を素材として展開されていることから推察されるように、二大階級への分化を前提としつつ、一方に於ける労働組合運動の発展と他方で、産業資本主義には民主主義が対応するといわれるように、普通選挙制の一般化と議会制度の発達を背景として社会主義政党的著しい発展がなされ、かくて「多数を獲得して権力へ」という革命のコースが設定されたのである。

レーニンも、トロツキーも、かかるオニインター型革命という国際的影響の中で、それをロシアにどのように適応させるかという課題を荷つていたのである。

何度も強調する通りに、レーニン主義が、帝国主義段階のマルク

どめた政治学的、哲学的なプロレタリアートの概念から、経済学的に規定された階級分析、階級規定が現われてきている。^③

①なお、藤本進治氏は「革命の哲学」で、一八四八年までのプロレタリアートは、実際的には「貧民」であるといわれている。そして、一八四八年を境として、その内的矛盾の展開によつてプロレタリアートへと一歩成熟したとされる。同様のことは、「思想」水田論文でも述べられている。

②なお、トロツキーの永続革命の定義と、マルクスとの関連については

「永続革命は、マルクスが、その概念に体与した意味においては、あらゆる形態の階級支配と妥協せず、民主的段階にとどまることなく、社会主義的諸政策と外部からの反動にたいする戦争につき進んでいくところの革命である」（トロツキー、P一六七）

とトロツキーは述べているが、これでは、マルクスに於ける革命論の二月革命を境とする変化を認めず、永続革命論を一般論に解消するものであろう。その事は、「マルクスは、ブルジョア革命を直接にプロレタリア革命に導くものとみなした。（ドイツ三月革命をさすものである）——引用者）マルクスは「誤つていた」しかし、彼の誤謬は実際的な性格のものであつて、方法的なものではなかつた」（同、P一六七）と述べていることにも現われている。

なお、レーニンとマルクスの永続革命の関連は、後述のべるとしても「二つの戦術」と「中央委員会の呼びかけ」を比較してみる時、レーニンがほとんど、マルクスを下じきにし

ス主義であるからといつて、帝国主義論を土台にすえた一個の体系だといつてはならない。スターリンの「レーニン主義の基礎」や「諸問題」は、個々の命題に於ける一面的理解、歪曲をふくむと同時に、そもそも、レーニンを、一個の閉じた体系として完結させた所に根本的問題が存在しているといわねばならない。多くのスターリン批判家の批判がスターリン否定の時流に乗つたさかしらであるのは（例えば、津田道夫。彼によれば、スターリン主義は、特殊の個別的なものを普遍的なものとする事、トロツキズムは、特殊なものをも普遍的なものに解消することだそうである。——「現代のトロツキズム」「現代コミニズム史」——）この二つを空文句といつてはあつても、それが、一つの現実であることを見落すことであり、レーニン主義との関連でいふならば、それを、一つの運動、批判として把握しないからである。「基礎」や「諸問題」を検討するならば、それに対する本格的批判の以外に困難なことに気づくであらう。

我々は、これまでの論点をふまえた上で、現代革命化としての永続革命と労働独裁の意義を検討しなればならない。いわば、レーニン主義の形成の論理を検討することによつて、その生々とした姿を把握しなればならないのである。

紙数の都合で後半は、本号に掲載できませんが、五月中旬に、パンフにして発行します。